

## 7.2.4 国際交流

### 【評価項目 7-0-1】 国際交流（国内外における教育研究交流）

- （必須要素）国際化への対応と国際交流の推進に関する基本方針の適切性
- （必須要素）国際レベルでの教育研究交流を緊密化させるための措置の適切性
- （選択要素）国内外の大学院間の組織的な教育研究交流の状況
- （選択要素）外国人教員の受け入れ体制の整備状況、運用の適切性
- （選択要素）教育研究及びその成果の外部発信の状況とその適切性
- （選択要素）国際的な教育研究交流、学術交流のために必要なコミュニケーション手段修得のための配慮の適切性

#### <2003 年度に設定した目標>

- 1.外国人教員及び外国人研究員の受け入れ体制の整備
- 2.海外の大学との協力・連携の充実

#### （現状の説明）

大学としての基本方針に従い、国際化への対応や国際交流の推進に努めている。

国際レベルでの教育研究交流を緊密化させるための措置は理工学研究科として組織的な取り組みはないが、各教員レベルでは大変な努力がなされている。たとえば教員による国際シンポジウムの開催、国際会議、シンポジウムへの教員、学生の参加、外国人客員教員、博士研究員、留学生の受け入れなどでかなりの実績を挙げている。

#### <理工学研究科外国人（教員・研究員）受け入れ状況一覧>

	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
客 員 教 員	4	3	6	6
客 員 研 究 員	1	2	0	1
受 託 研 究 員	1	0	7	10
博 士 研 究 員	6	9	7	9
大 学 院 研 究 員	5	0	0	0
外 国 人 特 別 研 究 員	2	3	0	0

外国人客員教員の受入体制は、招聘客員教員の一部については整備されているが、他の場合には、受け入れ教員の責任で便宜をはかったり研究費などで滞在費用を補填したりしている。留学生にはホームステイ、スタッフには客員教員用の外国人住宅が提供されているが、神戸三田キャンパスに移転後は、総合政策学部・理工学部2学部で1軒の住宅しか確保されておらず、受け入れに支障をきたしている。また、博士研究員や日本学術振興会の外国人招聘研究員等の場合には、住宅を学外で借りなければならないケースもあり、特に入居前の敷金と家具類に要する費用の調達が困難になっている。こういった来日当初の経済的負担が、本人だけでなくホスト教員及び学部にもかかっている。また短期の訪問者、共同研究者についても、特別の配慮がなされていないので、ホテルなどに滞在するか、本学部スタッフの住居に滞在しているのが現状である。

また、研究室では、客員教員の多くは教授室で大学院学生・卒研生と同居、あるいは客

員教授室で他の教員・研究員と同居している。また、実験室、研究室とも手狭であり、落ちついて職務に専念できないことが多い。一部、改善の方向として、2002年度から、レンタル・ラボ、レンタル・オフィスの制度が理工学部内に設けられた。

教育研究成果の外部発信については、多数の英文による論文発表がある。また教員の国際学会への参加、国際共同研究、招待講演等での海外出張も年毎に増加しており、2004年度は、22名、延べ40回の海外出張があった。

招聘した客員教員（招聘A～C）、客員研究員はいずれかの研究室に所属し、大学院の講義や研究活動で成果をあげており、その成果は学術雑誌及び『ANNUAL STUDIES』等に報告されている。

1992年度から発足した関西学院の博士研究員制度で各年度、物理学科、化学科各1名、計2名ずつ採用しているが、国内よりも海外からの応募者が多い。これとは別に、政府系団体等の受託研究の研究助成金を原資とする博士研究員も採用している。また2001年度からは、オープン・リサーチ・センター整備事業等の高度化推進事業によっても、博士研究員が採用できるようになった。これらのうち外国人の博士研究員は、2003年度7名、2004年度9名にのぼっている。

日本学術振興会外国人研究員を受託研究員として2003年度4名、2004年度4名受け入れた。また、2003年度、2004年度には、中国・タイの大学、研究所から計18名の受託研究員も受け入れたが、海外からの研究員受け入れは、様々な形態で今後も、確実に増加するものと予測される。また、研究打ち合わせをはじめ、外国からの訪問者は多数にのぼり、そうした方々による理工学部講演会もしばしば開催されて（2003年度9回、2004年度7回）、研究・教育両面でよき交流が行われている。受け入れた教員・研究員の住居環境は、外国人客員教員の場合と同様、大学によってある程度は配慮されてきたが、交流が活発になり、訪問者が増加するに伴い、提供できる住宅がなくなり大きな問題となっている。

国際交流としては、他に協定校からの交換教員や交換学生の制度があり、中国の吉林大学やインドネシアのサティヤ・ワチャナ・キリスト教大学から交換教員として2003年度2名、2004年度1名受け入れている。

#### （点検・評価の結果）

国際レベルでの教育研究交流を緊密化させるための措置については教員個人レベルでの努力が多く、組織的な取り組みが十分ではない。また、外国人客員教員の旅費、滞在費、住居、研究環境などに大きな問題点があり、受け入れ体制を早急に整備することが必要である。

教育研究及びその成果の外部発信の状況はかなり良い。また、海外の協定校との交流も成果を挙げている。

#### （改善の具体的方策）

国際レベルでの教育研究交流を緊密化させるための措置として組織的な取り組みが必要である。いずれは、理工学研究科あるいは理工学部の中に国際交流委員会のようなものを設置する方向で検討していく。